

次の一手

米國務長官を務めたキッシンジャー氏はその回想録で、中国との外交思想の違いをチェスと囲碁というゲームで表現した。領ける指摘だ。米国が関税、知財侵害、技術覇権、スパイ容疑、ウイグル、南シナ海、香港、台湾、次々とチェックメイトを繰り返すのに対し、のらりくらりと躲しながらの持久戦で応戦する。中国は防戦一方のように見えたがここに来て形勢を大きく変えるような手を打ってきた。国際協調への積極関与である。

コロナ後、マスク・戦狼外交といった悪手が国際社会の反感を増幅していたが、9月、習近平主席が2060年までに温室効果ガスの排出を実質ゼロすると宣言、世界最大の排出国が表明した大胆な目標が国際社会を驚かせた。米新政権に先手を打った格好だ。

そして11月、東アジア地域包括的経済連携(RCEP)に署名、インドの離脱で「自由で開かれたインド太平洋」はかすんでしまい、中国の存在感が際立った。そして驚きの一手が太平洋経済連携協定(TPP)への参加検討表明である。



米政権移行期の際を突いただけではなく、極めてよく練ら

れた妙手である。なぜか。まずRCEPとTPPの両取りである。アジア太平洋経済協力(APEC)加盟国間で自由貿易圏(FTAAP)を形成する遠大な構想の道筋として、TPP(米国主導、中国締め出し)、RCEP(米国抜き)の二通りあったが、RCEPは高い水準の自由化目標掲げるTPPと比べて見劣りし、その意義は低いとみられていた。

ところがトランプ政権で米国がTPPを離脱し、RCEPはTPPの「高い目標」圧力から解放され、中国の主張する「できるところから」という方向で妥結に至った。そして米国不在のTPPに中国が割って入れば、国際通商秩序制定の主役を乗っ取ることが可能になる。

次に、習主席肝いりの「一带一路」が債務の異など問題が噴出する中、主戦場を米国の存在感が薄れたアジア太平洋に移す効果である。「一带一路」はベースを落としながら態勢立て直しである。

そして見逃せないのが台湾封じ込めである。RCEP不参加の台湾は域内で取り残された。中国から距離を置き東南アジアや日米市場に活路を求めているが、TPP参加の目も消されてしまう。米国との自由貿易協定(FTA)締結に期待をかけるが、米の政権交代とともに一気に孤立感が高まった。さて、次の一手は誰がどこに打つ?

(アジア研究所教授 遊川和郎)

* 研究所だより *

第40回を迎えた今年のアジア研究所公開講座は、初めてのWeb開催でした。試行錯誤ではありましたが、講師の方々のご熱演、参加者の皆様のご協力により、大教室での講座とは一味違った雰囲気の中で身の濃い議論が展開できたのではないかと思っております。

これまで参加者は武蔵境のキャンパスに足を運んでいただけに限定されていましたが、今回は首都圏以外の方々、また国境を超えたご参加も多数いただき、当研究所と新たな接点ができたことも大きな収穫でした。今回のWebセミナーが広くアジアにご関心をお持ちの方々との交流を深めていく契機になれば、「四十而立不晩(四十にして立つもまた遅くなし)」です。

また、カメラの向こうではなく教室で生の熱気を感じて話を聞きたい、というご要望もあるかと思しますので、今後はWebとの併用なども考えていく予定です。

アジア研究所は、公開講座(年1回)やセミナー「アジア・ウォッチャー(年3回程度)」を開催しています。これらの講座や所報、プロジェクト報告書などを通じて、様々な角度からアジアの「今」を提示してまいります。どうぞ、ご期待ください。